

「ルワンダでの生活スタイルも、丁寧かつシンプルで無駄がなく、それでいて美しく、見習いたいとほれほれするほどでした。」

これは昨年9月、湯本沙友里さんがリリマを訪問し、その様子を短信に寄稿してくださったものの一部です。この箇所は、私のルワンダでの暮らしぶりについて言及されたもので、支援者のおひとりからこの点について質問がありました。今回の短信は、昨年この方にお答えしたものに加筆してお送り致します。

ルワンダにおいて私は、簡素に生きることを心掛けています。なぜなら、貧しい人に仕える者として召され、支援によって支えられ、人口の半数以上が貧しい人々で占める国で生きる者として、加えて地球環境を配慮する、などの観点からです。

ルワンダでの滞在が10年以上になる日本人の友人曰く、「在ルワンダの日本人の中で最もシンプルに暮らしているのが、緑さん」だそうです。

ルワンダの首都・キガリに居を構えていますが、自宅のある地域に外国人の姿は見られません。ここにはルワンダの庶民が居住し、定職に就くことができないその日暮らしの人たちや、素足で汚れた貧困家庭の子どもたちを目にします。

ある日、中心街からタクシーで帰宅した時、運転手が驚いて、「あなたはここに住んでいるんですか？これが、あなたの家ですか？」と繰り返し尋ねるのでした。おそらく彼は、外国人が住む高級住宅を想像していたのでしょう。

我が家の家具調度品は、近隣に住むルワンダの人々やリリマで働いているスタッフたちと比べても、格段に廉価です。しかしながら、湯本沙友里さんはこれらを好み、「木製で落ち着く」とおっしゃいました。私は、欧米の人たちのように多くのもので室内を飾るよりも、装飾を抑制した茶室の美を好みます。ですから我が家は、物が少なくすっきりしていると言えます。

移動の手段に私は乗り合いバスを使っていますが、外国人は自家用車を持ち公共の交通機関は使いません。リリマへ行くには、キガリからバスに乗り継いで3時間余りを要しますが、バス停で外国人に出会うことはまずありません。国際的なNGO（非営利組織）で20年以上働き、多くの外国人と接して来たルワンダ人の友人は、「あなたは、他の外国人と違う」と言います。おそらくそれは、私の生活ぶりを指しているのでしょう。

大言壮語とお笑いになるかも知れませんが、目指すところは、「力と物への誘惑を退け」（聖ヨゼフ修道会）る生き方、清貧です。

どこにあっても住まいの機能は、寛ぎ安らぎの場所であると思うのですが、異文化に生きる者として、この点を重視し大切にしています。自身を良好に保つため、自宅で心身の疲れを癒し、再生できるよう配慮しています。安らぐためには、治安上の安全や静けさ、清潔の保持が必要であり、特に清潔に努めています。途上国では、ごみが散乱し目を覆うような場所があります。また、貧しく苦しむ人たちと接していると、「美しいものを見たい」と思う時があります。ですから我が家ではできる範囲内の心地よさを心掛けています。子猫の額ほどの小さな花壇を造り、今はカワラナデシコに似た淡いピンク色の可憐な花が咲いています。このような拙宅は、外は喧噪でも一歩門を入ると、不思議に静寂が漂っています。

「ぶどう酒は人の心を喜ばせ、油は顔を輝かせパンは人の心を支える。」
（詩編 104：15）

日本人の料理研究家が「食べたものがその人を造る」と言っていました、アフリカで栄養失調の子どもたちを治療した経験からも、この言葉に同感です。しかしながら、食事は肉体だけでなく、心をも支えるというこの聖書のお言葉に「アーメン」です。

私は疲れた時、昆布とじゃこで出汁を取ったお味噌汁を作り、圧力釜で炊いたご飯と一緒に頂きます。丁寧にだしを取った味噌汁は味わい深く、心と体に浸透し充足感と落ち着きをもたらしてくれます。慣れ親しんだ文化としての食、気候や風土に合った食材とそこに根差した伝統的な調理法は、理に適っていて先人の知恵を感じます。ルワンダの食事でも日本のそれも文化としての食は、知恵に富んだものです。

ある人が言いました、「料理は物理と哲学だ」と。調理する上での化学反応と切る、蒸す、炒めるなど物理的な動作、そして作る人の思想、考え方が反映する、と言う意味なのでしょう。

すでに故人となった佐藤初女さんは、長年にわたって青森の「森のイスキヤ」で悩みを抱えた人を迎え入れ、家庭料理で持て成し支えました。特にこの方の作ったおにぎりは格別で、おにぎりを食べて自殺を思い留まった人があったそうです。佐藤初女さんは、言います。「対話だけが、悩みの解決法ではないんですね」（「心の道しるべーいのちのことば」佐藤初女著）

隠れたところで多くの配慮があったと思いますが、佐藤初女さんの働きは、先の聖書のお言葉を立証したと言えるのでしょうか。

食事は、来る日も来る日も倦まずたゆまず料理した地味な作業の結果です。そうして食べさせ育ててくれた祖母や母への感謝の念が湧いてきます。そして今、自身を養うため食を大切に、丁寧に調理するよう努めています。なおだしを取った昆布は、冷凍して後日、佃煮を作ります。

「いのちのスープ」を考案した料理研究科の辰巳芳子さんは、言います。「信じることができる人、それから何らかの望みをかけられる情熱を持っている人、それがやっぱり「人」だと思います。そして、それを基本的に支えていくのが食ではないか。」（「いのちと食」食べる―生きる力を支える、大久保満男編）

よりよく主に仕えるために、住まいを整え、食事を整えて心身を整えることだと考えます。

昨年の12月にセンターへ迎え入れた双子の母子は、3か月を過ぎました。ドルカスとエステルは、体重の増加こそ顕著ではありませんが、明らかに顔色が良くなり笑顔が見られるようになりました。センターへ来る前は、顔色が悪く苦渋に満ちた表情で、笑顔は見られませんでした。今では肌がきれいになって愛らしく、ドルカスは、数メートル自力で移動することができるようになりました。徐々に回復していると喜んでいます。どうぞ、続けてお祈りくださるようお願い致します。

3月26日
キガリにて
竹内 緑